

31

あきかぜ おばな うれ きり ふじ ねちか むさしの はら
秋風に尾花が末の霧はれて不二の嶺近き武蔵野の原

はなわほきいち

塙保己一

【歌意】

秋風が吹いて、薄の穂の先の霧が晴れ、富士山が近くに見える武蔵野原だよ。

〈鑑賞〉

天高く空気が澄んだように感じられる秋。風が吹いて、薄の穂の先の霧が晴れてくれたおかげで、富士山が近くに見える武蔵野原だ、という歌です。ただし、作者は幼いときに失明していますから、富士山の近さも心の目で感じているのでしょう。

32

こと は くもかすみは きょう ふじ たかね
言の葉もいかかくべき雲霞晴れぬ今日の不二の高根に

りょうかん

良寛

【歌意】

言葉ではどう表現したらいいだろう。雲やかすみも晴れた今日、はつきりと見えるこの富士の高根を。

〈鑑賞〉

こんなにもくつきりと見ることのできるすばらしい富士山の高根を言葉でどう表現したらいいのだろう、という歌。作者は子どもたちを愛し、旅にはよくてまりやおはじきを持って行きました。共に仲良く遊んだ逸話も多く、心あたたかな歌人です。書にも漢詩にも優れた人でした。お金のない時でも、寒さに震えている人に自らの着物を脱いで与えた、というエピソードも残っています。

33

ふじのねを木の間木の間にかへり見て松のかげふむ浮島が原

かがわかげき
香川景樹

【歌意】

富士山を木と木の間ごとに振り返りながら、松の木の影を踏みながら歩いている浮島が原だなあ。

〈鑑賞〉

当時の東海道は松並木になっていたのでしよう。その街道を歩きながら、街道随一と称えられた場所で、松の並木の切れ間ごとに富士山を仰ぎ見ている作者の姿が目に見えよう。

34

曇らねば誰が見てもよし富士の山生まれ姿で幾世経るとも

にのみやそんとく
二宮尊徳

【歌意】

雲に隠れなければ誰が見ても美しいと思う。富士山は、どんなに時代が移り変わっても。

〈鑑賞〉

勤勉で知られる二宮金次郎の作品です。十四歳で父を、その二年後に母を亡くした作者は日夜一生懸命に働き、寸暇を惜しんでは勉学に励んだ人でした。小田原生まれの場合は、子どもの頃から富士山の姿を仰ぎ見えています。

35

富士の山にけさ初雪も見えそめて秋風たちぬみほの松原

さいしよあつこ
税所敦子

【歌意】

富士山に今朝、初雪が初めて見えて、秋風が吹き始めたよ。この三保の松原では。

〈鑑賞〉

羽衣伝説のある三保の松原も北原白秋ら多くの歌人が歌を詠んだ「歌枕」の一つです。ここから見る富士山もとても有名です。日本を代表する景勝地から見た、富士山の一首。

36 は くも ふじ やま すがた か
晴れてよし曇りてもよし富士の山もとの姿は変わらざりけり

やまおかてつしゅう

山岡鉄舟

【歌意】 晴れていてもいい。曇っていてもいい。この雄大な富士の元の姿は、

決して変わることがないのだから。

〈鑑賞〉 富士山は見えても見えなくても、元の姿は変わることがありません。

千八百三十六年に生まれ、明治期まで生きた作者は剣・禅・書の達人と称され、剣の悟りの時に得たのがこの一首だったと言われています。

37 ひさかた みかづき うみ うぐ ふじ すそはらくも す
久方の三日月の湖ゆふ暮れて富士の裾原雲しづまれり

いとうさちお

伊藤左千夫

【歌意】 三日月の形をした湖の辺りも夕暮れ時となって、富士山の裾野には雲

が静かにかかっている。

〈鑑賞〉 「久方の」は「天」^{そら}「雨」^{あめ}「光」^{ひかり}「月」^{つき}等にかかる枕詞です。三日月のか

たちをした湖のあたりもすっかり夕暮れ時となって、富士山のすそ野には雲がかかっている、という歌です。作者は、「牛飼が歌よむ時に世のなかの新しき歌大いにおこる」という短歌や小説『野菊の墓』でも知られています。

38 万国の博覧会にもち出せば一等賞を取らん不尽山

ばんこく

はくらんかい

だ

いちとうしよう

と

ふじさん

まさおかしき
正岡子規

【歌意】

万国博覧会に出すことができたならば、一等賞をとるだろうよ、この富士山は。

〈鑑賞〉

千九百年にパリで万博が開催された時代に生きた作者。万国博覧会に出すことが出来たなら、この富士山がきつと一等賞をとるだろう、という痛快な一首です。わずか三十数年の人生の中で多くの短歌・俳句を遺した作者は、江戸時代以前の古書から富士山に関する記述を抜粋した『富士のよせ書』の編者の一人としても知られています。

39 萬のものみなひそまりて天地は一つの不二となりけるかも

よろず

あめつち

ひと

ふじ

いしくれちまた
石樽千亦

【歌意】

全てのものがみんなひっそりと静かになって、天と地が一つの富士山となつたことだよ。

〈鑑賞〉

全てのものが皆ひそやかに静かになって、天と地はたった一つの富士山のみになったように思える、という歌です。圧倒的な存在感をもつて富士山が感じられたのでしょうか。作者は帝国水難救助会常任理事を務め、日本各地の海や港を訪ね歩いた人でした。

40 富士の嶺の石の室屋の岩枕ゆめ白雲の上にただよふ

ふじ

ね

いし

むろや

いわくら

しらくも

うえ

う

ささきのぶつな
佐佐木信綱

【歌意】

富士山の山腹の岩屋での旅寝では、夢も白い雲の上に漂っている。

〈鑑賞〉

富士山の洞窟の岩を枕に寝るような、そんな旅の道中の就寝では、夢は白き雲の上を漂っているようにだと詠んでいます。他に、「初春の真すみの空にましろなる曙の富士を仰ぎけるかも」の歌も在る作者は、晩年は熱海市で暮らした第一回文化勲章受章歌人で国文学者です。